

日本における福音派の聖書学

「福音主義神学」誌において聖書学プロパーがそのトピックとして捉えられることはまれである。福音主義神学会の会員による聖書学の研究の数もそれほど多くない。残念なことであるが、日本における福音派の聖書学はそれほど活発であるとは言い難い。

北米における福音派の聖書学

アメリカ合衆国の福音派はそれ自体が独特の文化のもとにある（カナダの福音派とも微妙に異なる）。日本の福音派の聖書学は、アメリカ合衆国の福音派の聖書学の影響を多大に受けている。ただし、博士号をもっている（博士号がなければ学者ではないというわけではない）福音派の聖書学者の半数以上が、北米で学んだ後に、イギリスで博士号を取っている。

そこで、今回の発表では、アメリカ合衆国の福音派で取り上げられている、聖書学に関するいくつかの課題をピックアップして、議論することとする。いくつかの具体的なトピックを取り上げるが、その詳細の検討に焦点を当てるのではなく、これらの課題から見えてくる、より根源的な、解釈論的問題に焦点を当てていきたい。

旧約聖書：創世記1～2章の解釈

J. Daryl Charles, ed. Reading Genesis 1-2: An Evangelical Conversation. Peabody: Hendrickson, 2013.

1. 古代中近東のテキストや世界認識との関わりの中で聖書のテキストを読むことの重要性については、一致している。
2. しかし、数多くの意見の相違がある。まず、古代中近東の世界認識と聖書の世界認識がどのような関係にあるのか、つまり、世界認識を共有しているのか、全く対抗的なものなのか。どのような点で共有し、どのような点で対抗的なのか。次に、創世記のテキストがどのようなジャンルに属しているのか。三つ目に、ジャンルの問題から派生するが、創世記のテキストで語られたことが、歴史上、実際に起こった出来事なのか。どこまでが史実に根ざしており、どこからが比喩や象徴なのか。
3. このような意見の相違が起こる原因は、創世記の古代の読者がそのテキストをどのように読み、どのように理解したかについての、意見の相違が現代の読者の間にあるからである。
4. 現代の私たちは、啓蒙主義以降の西欧文明から生み出された世界理解、歴史理解の深い影響を受けている。たとえば、史実に根ざすことが真理であることの（最）重要な条件であること、科学的、客観的記述のほうが、比喩的、象徴的記述よりもより真実に近いこと、などがある。したがって、聖書と科学の関わりにこだわること、「一日」の解釈にこだわること、アダム史実性にこだわることの原因の一つには、啓蒙主義以降の西欧文明の影響がある。もちろん、古代人が史実性や客観性や科学（彼らの時代の）にこだわらなかった、という主張をしているわけではない。しかし、現代の私たちの傾向を熟知した上で、古代の読者について検討することは、時代錯誤を避ける意味で、重要だろう。
5. 追求されるべきことは、創世記が古代の人々を第一義的な読者として想定したという前提に立って、現代人の世界理解やテキスト理解を括弧に入れて、より丁寧に古代の人々の世界理解や真理観を

研究し、彼らの視点からテキストを読み直すことではないか。

新約聖書：義認

James K. Beilby & Paul Rhodes Eddy, ed. Justification: Five Views. Downers Grove: IVP Academic, 2011.

1. 新約聖書を理解する場合、第二神殿期ユダヤ教の文脈と関わらせて読むことの重要性は、誰も否定しない。
2. 新約聖書の背景にある第二神殿期のユダヤ教を必然的に取り上げなければならないが、それ自体が多様性をもつ。そのため、パウロの背景となるユダヤ教とはどのようなものなのか、パウロの論敵はどのようなユダヤ教理解をもっていたのか、正確に見極める必要がある。さらに、パウロの理解と、彼の論争相手が背景に持つ特定の第二神殿期ユダヤ教の間に、どのような連続性と不連続性があったのか、も見極める必要がある。このあたりの研究は、今後も続けられるべきだろう。
3. もう一つ、課題がある。福音派は、聖書を最高の権威と重んじつつも、十六世紀の宗教改革以降の伝統、信仰告白、神学的カテゴリーの影響下で聖書を読む傾向がある。教派神学に則っている人も、いわゆる聖書主義である人も、どちらも宗教改革の影響を避けることはできない。だからこそ、現代の読者が置かれている文脈を括弧に入れて聖書を読むことは、大変困難な作業である。義認を考える場合、これまでの伝統によって培われてきた理解がわれわれの聖書解釈に与える影響について検討する必要がある。そして、「歴史的な聖書の読み」と、それぞれが受け継いできている信仰告白や神学的カテゴリーの間に、どのような折り合いを見いだすのか。Michael Birdのような「進歩的改革派（ルター派、きよめ派、メノナイト派・・・）」へと進むべきなのか。「伝統主義者」であり続けるべきなのか。はたまた、伝統を否定する、徹底的な聖書主義者なのか。具体的なテキストの解釈を通して、この課題に取り組む必要がある。
4. ただし、聖書解釈史としての信仰告白や神学的カテゴリーが、聖書の歴史的な読みを妨げるとは一概に言えない。聖書解釈史の研究が「聖書への反応の歴史」という観点から盛んになっているが、このような研究が現代の福音派の聖書学にどのように寄与するのか、検討に値する。さらに、啓蒙主義以前のいわゆる「霊的な解釈」を福音派の聖書学はどのように評価するのか、今後の研究が求められよう。

新約聖書における旧約聖書

Kenneth Berding & Jonathan Lunde, ed. Three Views on the New Testament Use of the Old Testament. Grand Rapids: Zondervan, 2008.

1. 新約聖書における旧約聖書の引用についての中心的な課題は、すでに取り上げられて *sensus plenior* の有無であり、予形論の意義である。しかし、この問題の背後には、旧約聖書の著者たちと究極的な著者である神との関係の理解があり、究極的な著者である神の意図を理解するための手法としての「歴史的文法的」な読みの有効性の可否がある。さらには、新約聖書の著者たちが、現代の福音派の解釈者が用いる、「歴史的文法的」な手法を用いて旧約聖書を読んだのか、それとも第二神殿期のユダヤ教やヘレニズム文化の中で一般的であった手法で旧約聖書を読んだのか、という疑問も存在する。したがって、争点の背景には、聖書の神学的理解の違いが存在するとともに、新約聖書の著者たちの解釈手法に関する理解の違いも存在する。
2. 聖書学者としてこの議論を見るとき、神学的前提をできるかぎり括弧に入れ、弁証的な思惑を横に

において、新約聖書の著者たちがどのように旧約聖書を理解し、どのように神の語りと旧約聖書のことばとの関係を理解したかを、具体的なテキストを検討し、帰納的に探る必要性を覚える。旧約聖書の言葉そのものが神の語りなのか。それとも、神は旧約聖書を通して語るのか。もっとニュアンスのある位置づけなのか。加えて、現代の福音派では、「何を意味したか」と「何を意味するか」の分離と並行して、「解釈」と「適用」を分離する傾向にあるが（厳密には、この二つの分離は不可能である）、果たしてそれと同じことを、新約聖書の著者たちもしているのだろうか。分離できないとしたら、神はどのようにして旧約聖書から語っているのだろうか。

3. 新約聖書の著者たちを取り巻くこれらの現象を理解した上で、聖書の神学的理解を現代の福音派は再構築する必要があるのではないか。ある特定の論争から生まれてきた神学（聖書論の構築は、多くの場合、なんらかの論争の帰結である）から聖書の現象を理解するのではなく、聖書の現象から神学を構築する方法論、これまでの方法論よりもより帰納的な（下からの？）神学方法論が求められる。
4. 次の課題ともつながることであるが、新約聖書の著者たちが旧約聖書「全体」をどのように理解していたか、も重要な争点である。Kaiserらが考えているように旧約聖書の一語一句がそのままキリストと教会のできごとと結びつけられているのか（ミクロな視点）。それとも、ストーリーというかたちでまとめられるようなものとして旧約聖書を理解してきたのか（マクロな視点）。もちろん、両者が交じっているだろうが、どの程度、ストーリー性をもっているか理解されていたのか、注意深い検討が必要である。現象の細部の検討とともに、全体像を見る研究ももっと必要だろう。

聖書から神学への道筋

Gary T. Meadors, ed. Four Views on Moving beyond the Bible to Theology. Grand Rapids: Zondervan, 2009.

1. Christopher J. H. Wrightも書いているが、一つの聖書解釈の方法論が正しくて、他が間違っている、というわけではない。ただ、私たちが日本という文脈にあることを考えると、聖書の世界でもなく、欧米の文化でもない、日本という国で聖書からの神学と倫理を考える必要がある。したがって、私たちの文脈においてどのような手段が有効か、とう問題を設定して取り組む必要がある。その意味では、啓蒙主義の影響を乗り越えようとしている、聖書全体を神のドラマと考え、そこに参与する者としての即興演奏としての聖書解釈という理解は魅力的である。また、Wrightの宣教的解釈（この背後には聖書全体のストーリー性を含んではいるが）の重要性の主張も納得できる。聖書は本質的に、宣教的（この言葉にはさまざまな意味があるが）な文章である。歴史的文法的な解釈から時を超えた真理や倫理基準を見いだすという考え方は、正しい側面もあるが、啓蒙主義の影響が大きいように思える。ある特定の文化と時代の中に生きている私たちが、時を超える何かを見いだすことができるのだろうか。ポスト・モダニズムからの批評を留意しつつ、手法そのものの背景にある前提を検討する必要がある。
2. 倫理という観点から見ると、聖書解釈のアプローチは大きく二つに分けられる。一つは、聖書から倫理基準としての「ルール」を見いだそうとするアプローチ。もう一つは、神のドラマの演者にふさわしい知恵に満ちた人となるという「人格形成」を重んじるアプローチ。前者は規則ベースの倫理理解であり、後者は美德ベースの倫理理解である。聖書そのものが主張している倫理理解はどちらであるのか。聖書そのものの倫理理解にふさわしい、神学と倫理のための聖書解釈の方法論が求められるべきである。